

長崎検定

一級さん

Vol.10

「長崎迷」

長崎検定終わりなき道

大坪辰也さん

合格率四・八％。長崎歴史文化観光検定の最難関を突破した一級ホルダー。その卓越した識見には、なにやら一家言ありそうです。
みづくはらたに寄稿願いました。

長崎市の栄誉市民でもある、言わずと知れた「さだまさし」さんのグループ「時代の歌に「紫陽花の詩」という名曲がある。蜷茶屋、鳴滝、中川、寺町、思案橋、眼鏡橋など長崎の地名・人気スポットが出てくる叙情的な歌詞とメロディーが印象的な美しい歌である。子供の頃、長崎市外（旧琴海町）に住んでいた私にとっては、長崎市内は学校の社会科見学以外ではほとんど行くことがない都会であった。「この歌により長崎のイメージを膨らませ、思いを馳せられる。長崎はそんな街だった。こんな当時の想いが、検定を受ける原点だったような気がする。」この歌について本人の「マゼイの中に、心がお腹をすかしてしまったり、僕は、この詩の通りに歩いてみるんです」と綴られていた。確かに長崎は街を歩くと元気になる、パワーがもらえるそんな街だ。

長崎検定を知る前の私は、どちらかというと地元よりモ外的世界、とくに中国の歴史に興味をもっていたこともあり、地元の歴史・文化に目を向けることが少なかつた。

しかしながら、長崎を訪れる他県の友人などを案内する機会が増えるにつれ、地元について付け刃の知識しか持ち合わせていないことを痛感していた。そんな折、本屋で長崎検定のテキストに出会い、これは結構面白いと早速購入し、第2回の2級にチャレンジし、幸いにも合格。調子に乗って翌年1級に挑戦したが、あえなく撃沈。

落ちた当初は、自分の不勉強を棚に上げ、1級の問題

の難しさをネタに「長崎甚左衛門の洗礼名なんてフツーしらんやろ。」ちなみに答えは「ベルナルド」などと、酒の席で友人相手に愚痴を「ほして」いた。そのうち、長崎のことをもっと深く知る機会が増えたのだと気持ちを持ち替えて、リベンジとはかりに再度1級にチャレンジすることとした。実際、今回は公式テキストだけでなく、「旅する長崎学」など参考文献にも幅広く目を通し、また、やはり現地を見る必要があると思い、休日には自分のメタボ対策も兼ねて妻と一緒に歩いて市内の史跡めぐりをし、楽しみながら身につけてきた。やはり本当に理解するためには実際に現地を歩いて自分の目で確かめて、そしてそれを肌で感じるというのが大事だと思えた。たとえば「1級受験対策講座で学んだ興福寺の特色の一つである「氷裂式組子」の丸窓も実際行ってみて実物のすばらしさに感動した。長崎には豊かな歴史に育まれたすばらしい史跡や文化財がある。それをこのように活かす、後世に伝えていくのか、そんな想いもこの間新たに実感した。そんな中、今年の試験に臨んだところ幸いにも合格することができ、一年浪人？したおかげで、さらに長崎のことを深く知ることができた。作家の陳舜臣さんのマゼイの中でその街に惚れ込むことを「酔っ」といって表現されていたが、この表現を借りると、私はこの検定を通じてかなり重症の「長崎酔い」にかかったような気がする。長崎は知れば知るほど人を夢中にさせる街、長崎には人を酔わせる要素がたくさんある。

中国語では、あるほどに熱中するほど、夢中になるほど

ファンになることを「迷」という漢字が使われる。例えばサッカーファンであれば「足球迷」。さしずめ、今の私は「長崎迷」。これまで検定を通じて多岐に渡る長崎の魅力にふれてきたが、実際まだまだほんの一部。長年趣味で続けている中国語は、「コミュニケーションのツールとして学んでいるものだが、相手国の言葉だけでなく、自国、とりわけ地元の歴史・文化をきちんと身につけ、お互いの文化や歴史を知ることが、「コミュニケーション」をどうやっていくうえで非常に重要である」と長崎検定を通じて改めて実感した。

1級という称号をいただいたものの、長崎学の先達の方々と、さるくガイドなど様々な分野で活躍されている方々に比べると私はまだまだ浅い知識しか持ち合わせていない。7月には「長崎検定1級の会」も発足し、名前を連ねさせてほしい。

1級合格で満足することなく、ゴールをスタートと位置づけ、会としての今後の活動も含め、微力ながら長崎の魅力発信のお役に立ちたいと思う。



【プロフィール】
昭和39年、長崎市（旧琴海町）生まれ。45歳。長崎県職員。
趣味は、中国語、山登り、パドミントン、愛猫ピートと遊ぶこと。
最近は、妻と一緒に「農業塾」に参加し、野菜作りを勉強中。